



徒
勞

水
野
仙
子

三時近く、お紋は學校から歸つて來た。一人別れ二人別れ、三人目のが其處の豆腐屋に這入つてしまふと、足場の細木が鋭く響つて居る、藥種屋の倉普請のところから一人になる。手にとるやうに見えるけれども、遠いと聞いた西の連山の、眞つ白ながら處々斑なのを望んで、つひ其處の角から曲ると三軒目、と思ふと、急に胸をどきりとさせて足を早めた。昨日の朝から今日はもう午後たもの、必と出産て居ると思ふ。思ふけれども然しやつぱり嘘らしいやうな氣がする。嘘な筈はないのだけれども、出産さて居くなくてはならないのだけれども……。出産て居るとさう念を打つて勢よく硝子戸を開けた。火鉢に落つかぶさつて、固まつて何か見て居た三人が一樣に眞つ赤な頬を向けた。びしやりと硝子を響かしてまた／＼奥に行かうとすると、

「オットお紋ちゃん落し物」

虎次といふのが、小さな目を笑つて居る。

「なアに？」

「足跡！」



に落つかぶさつて、固まつて何か見て居た三人が一樣に眞つ赤な頬を向けた。びしやりと硝子を響かしてまた／＼奥に行かうとする時、

「オットお紋ちゃん落し物」

虎次といふのが、小さな目を笑つて居る。

「なアに？」

「足跡！」

「三度」

幸齋ともしないで、現場の幸吉が苦笑ひして居るやうな気がしながら、見向きもしないで勝手に行つた。

見馴れぬ下駄がぬいてある。上り框には手袋の喰み出た外套が頼れて居る。長火鉢がぼつねんとして、

其處には誰れも居なかつた。荷物を抱へたまゝで、部屋唐紙を一寸ばかりカタと言はせて見ると、屏

風のかげから、誰れか後さまに首を出したやうだつて、見窮める隙もなく慌て、其處を退いてしまつた。

不安の胸をどきつかせながら、暫く立つて耳を傾けて居たが、譯がわからず中は聞りとして居る。臺所

を覗いて見ると、恰度お菊が前掛けで濡れ手を拭き／＼裏口から這入つて來た。

「まあだ？」我ながら聲がすくんだ。

お菊は黙つて首をさげた。褪せた顔色をして居る。お紋は急に落膽して淋しい顔をした。何故、如何し

て、といふやうな言葉が、むく／＼胸先に蠢めいて居るやうだけれども、お菊が無言つて居るので、お

紋も黙つてそこに突つたつた。

「む……………むむ……………」

滞つた沈黙を衝いて力のない呻きが洩れた。またお菊の顔を見なければ、目も動かさずやつぱり黙つ

て居る。

「あ痛……………あ／＼あ／＼……………」

陳痛の襲來に、我知らず洩らす苦痛の聲が、突如としてお紋の胸を打つた。お／＼／＼／＼、弱くなり

強くなり、苦惱の呻吟が腸を抉ぐる。

「お紋ちゃんお医者様／＼」

伊四郎が手をあげて店から知らした。彈かれたやうに其處を退くと、つと障子のかげになつて首だけ出



して見た。お紋はまだ袴もぬかずに居る。部屋から千司が出て来て、背の高い醫者を導いた。「や！」と醫者同志の挨拶が聞えたかと思ふと、びたりとまた唐紙を閉て切つた。

逢隈の流れが、西と東に國を分けて、其西域を北に貫く奥羽街道に當つて、群がつて馬の背のやうな形をなした町に、宵より吹き出した木枯は、冬の夜のからりとした、弄ぶものなきに飽いたやう、種々の装ひをした寒念佛の連中が、法華經の赤い提灯にうつし出された黒い影を静かに送つた。其太鼓の音に吼える犬の聲も静まると、時折カタコトと戸を揺る音が、淋しく耳について来る。

佐野屋の店には何時までも徒らな光りが流れた。欠伸ばかりして居た供の車夫が、何やら講釋本を借りて、足の下に火を置いて貰つて、寝そべつて讀み耽つて居る。それを忘れたやうに、各手も好みくもの目に目を曝して居た。虎次は火鉢にかぶさつて眠つてしまつた。

一先づ引きあげた醫者が、夜になつてから集まつて、もう暫時經つた。お才は時々部屋を出て来て煙草を吸ふ。昨夜も一晚寝なかつたので、青い顔をして、油氣のない白髪頭がぼそ／＼逆立つて居る。標ふ手付まで三服位たて續けに燻かして居るのを、黙つて見て居たお紋が、

「姉ちゃんは赤兒なんか要んねのになア」と溜息を吐く。

「さうともい、世の中にや子供のいな人がいくらもあるもの……もう／＼仕方がなから赤兒なんぞどうでもい、早く挽き出してしまはないと、吾が身體が堪ねわなのお、愛はなかく承知しないんだし……それも當り前さ、欲しいは尤もだけれども……あゝ／＼傍の見る目が苦で……」

帯に手を入れて頽然と首を垂れる。そしては思ひ出したやうに含嗽をして、豆ランプの燈つて居る神棚



ふ手付まで三服位たて續けに煙かして居るのを、黙つて見て居たお紋が、
 「姉ちゃんも赤兒なんか要んねのになア」と溜息を吐く。

「さうともい、世の中の人にや子供のない人がいくらもあるもの……もう……仕方ながら赤兒なんぞ
 どうでもい、早く挽き出してしまはないと、吾が身體が堪んねわな、愛はなか……承知しないんだし
 ……それも當り前さ、欲しいは尤もだけれども……あ……傍の見る目が苦で……」
 帯に手を入れて頼然と首を垂れる。そしては思ひ出したやうに含嗽をして、豆ランプの燈つて居る神棚

に一心に祈願を請める。夕方、裏口から隣家の新造さんが何處からか借りて来てくれた、安産の御神符
 などが備へられてあるのだ。

「紋や、く」
 佛壇の脇の暗い部屋から、舌の廻らぬ呼び聲がするので、行つて見ると、中風で身體の利かない伯父—
 —お紋は座敷爺と呼んで居る—が、大きな間の抜けた顔を願で招いで居る。

「なアに？」と眉を寄せてそこの炬燵によりかゝると、暫らく口をもぐぐさせて居たが、
 「姉やはどうした、まアだ生せないでんの、む？む？紋や」と利く方の左の手をわくくさせる。
 「あ、あのない、まアだなの、お醫者様が三人来てんの……」

「あ、あ、あ痛、あ、あ、あ、あ、あ」
 折も折、此處にも強く世の常ならぬ其苦痛の叫びが洩れた。
 座敷爺は突然聲をあげて泣き出した。悲しいと云つては、嬉しいと云つては、直ぐに泣き出すのが其
 癖であつた。

夜食のよごれ器を洗つて、お菊が赤い手をして勝手にあがつて来た。

「寒いことない(ねえ)」と、首をふるつて火鉢に手を翳す。
 「臺所は餘計寒かっぱい」、言ひながらお紋は白くなつた炭の灰を搔いては五徳に乗せて、それをならし
 て字を書いて、消してはまたならして居る。

「え、随分……下の方からすうく風が来て……お紋ちゃんあんた睡くねえの？」
 お紋は無言つてぼつくりと首をさげた。





「あ痛つ……む……いんや生きてる……生きてる……生きてる……あたゝゝあゝ

あし

二人は顔を見合した。そしてまた目を落した。抉ぐられるやうに胸が苦しい。居ても起つても居られぬとはこの事だと思ふ。呻吟が叫びとなり、叫んでは呻吟き、今は絶え間なく、人も忘れ身も忘れ、叫んで居る、呻吟して居る。襖一重隔てた其場の、恐ろしい光景が、見えなければ見えなだけで、唸る聲の弱ければ弱いで氣にかゝり、時々絶え入るやうに張りあげる叫びに胸を躍らした。間々にカチャリと金物の觸れ合ふ音、それには一々ヒヤリと氷を浴びた。

「お紋ちゃん！ない（ねえ）一生！嫁になんぞなるもんでねえない！」
あげたお紋の顔に、お菊の目の涙が寫つた。

「えゝ！」

お紋はまだ子供である。けれども其答へには力が籠つた。女の果敢なさ！それよりもお紋の胸には、恐ろしさが先づ浸み込んだのであらう。

三

あぐねて醫者も暫時手をひいた。折を見ては、銷子も兩三度かけて見たが、たい苦痛を増させるばかりであつた。

産婦は飽迄も胎兒に手をつけることを拒んだ。かゝる苦しみを誰が爲めにする？十月の辛慘を徒勞にして、今また此世の常ならぬ苦惱をも、甲斐ない努力にしてしまはなければならぬのか？産婦には如何にもそれが心外であつた。興奮しては果ては醫者をも罵つた。



あぐねて醫者も暫時手をひいた。折を見ては、鉗子も兩三度かけて見たが、たい苦痛を増させるばかりであつた。

産婦は飽迄も胎兒に手をつけることを拒んだ。かゝる苦しみを誰が爲めにする？十月の辛慘を徒勞にして、今また此世の常ならぬ苦惱をも、甲斐ない努力にしてしまはなければならぬのか？産婦には如何にもそれが心外であつた。興奮しては果ては醫者をも罵つた。

お才は戰慄して居た。居ては起ち、起つては坐り、出来ることなれば、醫者の脛に噛りついて、聲を放つて泣きたいと思つた。子供などはどうでもいゝ、要らぬ。早く娘の此苦痛を救つてくれ、此苦惱を見て居なければならぬこの胸の苦しさ辛らさを除いてくれ、といつて泣きたいと思つた。親心に、幾分か未練があつて、斷然した處置を取り得ない、千司の心が齒痒ゆいと思つた。娘を殺してしまふ積りか、と詰つてやりたいと思つた。

「もう駄目だ！」
醫者の一人が囁いた。

「もう心音が聞こえなくなつた。……ねえ君、この儘にしといちや母體が危険だ」
意見を求めるやうに振り向いた。

「やりませうよ！」

一人が發議する。さすがに今までは醫者も躊躇つて居たが、もうかうなれば相當の處置をとらなければならぬ。千司は一寸物影に呼ばれた。

「は、は、もう致し方がありません！どうなと先生方の宜しきやうに……」

胸を叩いて千司は大きくうなづいた。

「ねえ貴女、お諦めなさい、貴女は先天的に骨盤といふものが狹窄なのだ……仕方ない持つて生れたんだから……それは如何したつて胎兒が尋常に育てば生めようがない譯になつてゐるんだから……ね、諦めてお覺悟なさい、この儘にしようと今度は貴女が危険になりますよ、貴女の身體が堪らなくなる。まだお若いんだから、これからいくらも生むことが出来ます、今度は私が大丈夫生させてあげる



から……えりそりや貴女の心の迷ひだ。どうしても長い間の時間だもの、生きて居よう筈はない。ね、ね、もうお諦めなさい」

「……産婆も口を添へる。お才も諭した。千司も言つた。

「……赤く爛れた洋燈の光りに、手術着の白衣が動いた。穿顔器の光りが箱を出た時、男ながら千司は面を背向けた。消毒、用意、萬端整つて、一人は産婦の手を持つた。

「いゝですか」

「一人の手は、つと眼を閉ぢたお愛の鼻先に行く。

「固唾を呑んだ、

「……貴女の名はなんて云ひますか？」

「愛」

「年は？」

「二十四」

「おつ母さんのお年は？」

「……五十……五十一でせう」

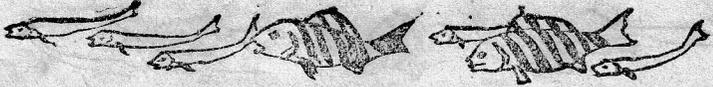
「その名は？」

「お才」

「貴女はお兄弟がありますか？」



「おつ母さんのお年は？」
 「……………五十……………五十一でせう」
 「その名は？」
 「お才」
 「貴女はお兄弟がありますか」



「はい」
 「幾人ありますか？」
 「……………ふ、ふ、た、り……………」
 「お妹さんですか、弟さんですか」
 「……………」
 「お妹さんですか、弟さんですか？」
 「……………」
 「お愛さん！」
 「……………はアい」
 「貴女はお妹さんがありますか」
 「……………も……………紋……………」
 「貴女のお年はおいくつです？」
 「……………十四……………」
 「おつ母さんのお名前は？」
 「……………」
 「おつ母さんのお名前は」
 「お紋……………」
 「お年は？」



「……………」

「よし！」

その鼻先の手は退けられた。動いた人の手に利器が光つた。

「あゝおっ母さん！」と突然産婦は躡き出した。半魔睡のうちに、臍うな疼痛を感じたのであらう。

「あいよ、此處に居るぞい、此處に居るぞい」お才はおろく聲で覗き込んだ。

「御心配には及びませんよ、夢中なんですから……………」

「あたゝゝゝ……………足、足、あ痛ッ畜生！」

手を空にやつて何物かを拂ひ退けようとする、

「貴夫、貴夫、あゝ辛い、辛いぞい、あ痛た……………醫者、醫者が……………」

「お愛、お愛」

お才はおろくしてはかう呼んで見る。

天を怨み、母を呼び、醫者を罵り、夫に苦を訴へ、躁いて、泣いて、空にあがく。

「あれくびくく動いてる！貴夫、あれ生きてる、生きてる！あれい！」

「しめた！」

一人は腕に力を籠めた。

「うむ——」

「さら来た！」



天を怨み、母を呼び、醫者を罵り、夫に苦を訴へ、躁いて、泣いて、空にあがく。
 「あれくびくく動いてる！ 貴夫、あれ生きてる、生きてる！ あれい！」

「しめた！」
 一人は腕に力を籠めた。

「うむ——」
 「そろ来た！」

「あ……」

「うむ——」

「あつ畜生——」

産婦は一聲強く叫んだ。

「しめた！」

二人は忙しく裾の方に集まつた。

一人が二の腕は唐紅に染んで居る………

* * * * *

夢のやうな嬉しさを籠めて、炬燵にかけて置いた産衣は徒らに綿がふくれて居た。数々の襦袢、それらを一纏めにしてお才は大きな風呂敷に包んだ。何處か目につかぬ倉の二階にでも押しこめてしまふ積りなのだ。ふと先程産婆が、「男でしたよ」と囁いたことを思ひ出した。魚屋が魚を扱ふやうに、白衣の三人が集まつて何やら私語き交して居る肩越しに、慄ふ足を踏みぬめて一目覗いて見た、あの血みどろの……お才は目を閉ちて首を振つた。

高窓の硝子はほの白んだ。二三日居坐つた寒氣の、曉は殊に身に沁みて、過度の疲勞に惘然した頭腦を鋭く刺した。

何か物足らぬ、何か物足らぬ、部屋に這入つて見た。

逃げ残つた人息蒸に、火氣の腐爛が混じて一種の腥い臭氣が強く鼻を衝く。

「お愛——」





枕許に坐つて、静かにかう呼んで見た。お愛は微かに目を開いてまた閉ぢた。傷はしさ、可憐さの思ひが、母の胸を涙となつて走つた。

呪はれた生は、白木の小函に納められて、白木綿で巻かれて小机の上に安置れてある。灰を巻く線香の煙は、解け難き謎を書いて室を流れた――。

八疊の電燈

皆川行人

店は小間物屋で夜でも客がある。主は長火鉢に徳利をのせて坐り、娘のお光と下女と小僧は店の火鉢を圍んで、家族四人は四疊半に居た。友達らしい聲なので、小僧のあとからお光が出て、細めな白熱瓦斯を明くしながらお客様に挨拶した。

「お父つあん、此間來た帶止は何處でした。」とお光がきく。

「上の抽匣の三番目だ。」と云ひながら、主は火鉢の傍をはなれずに、とろんこな目で、

「お冬さんもあしたは市村座ですかね。」

「お冬さんぢやないは、お隣のおまつさん。」とお光が答へる。

「おまつさんかい。おまつさんもやつぱり連中の御仲間でせう。」

「えい。」と店の娘も答へて、帶止をあれこれと違つて、お光とあすの三番目までしつぱりして歸つた。二人